

朝鮮仏教会の歴史と性格

—一九二〇年代『朝鮮仏教総書』刊行を計画した団体—

佐藤 厚

一 問題の所在

現在、韓国仏教研究の基本資料といえは『韓国仏教全書』を挙げることができる。これは一九七九年から刊行が始まり、新羅時代から朝鮮時代に至る韓国の僧侶の著作を集めた全集である。二〇二四年現在、一五巻まで刊行されている。

ところでこの「韓国仏教全書」刊行に先立つ六〇年前、これと類似した計画があったのだが、それが「朝鮮仏教総書」刊行計画である。これは、一、一九二〇年代の計画であり、二、内容は韓国の僧侶を中心として五三三種の典籍の刊行を計画し、三、実際には刊行ができなかった。筆者はこの「朝鮮仏教総書」に関心を持ち、過去に二編の論文を書いた。

・「朝鮮仏教総書刊行計画について（一）—目録の紹介」東洋大学東洋学研究所『東洋学研究』五三号（東洋大学東洋学研究所、二〇一五年三月）

・「朝鮮仏教総書刊行計画について（二）—計画の経緯」東洋大学東洋学研究所『東洋学研究』五四号（東洋大学東洋学研究所、二〇一六年三月）

前者は刊行目録の紹介を中心とした研究であり、後者は刊行計画の経緯を中心とした研究である。

計画の中心となった人物が二人いる。一人は李能和（一八六九—一九四三）である。彼は日本統治時代の韓国を代表する知識人であり、一九一八年には『朝鮮仏教通史』を刊行した。もう一人は鄭晧震（一八九〇—？）である。彼は双溪寺の起竜禪師の弟子で、一九一四年に日本の曹洞宗大学（現在の駒澤大学）に留学した。ところで当時、日本では『正統藏経』が刊行されていた。これを見た韓国人僧侶たちは驚いた。なぜなら、その中にはすでに韓国では失われた古代の韓国の僧侶たちの著作が含まれていたからである。さらに日本の仏教者の著作にもそうした古代の韓国人僧侶の著作が多数引用されていた。鄭晧震は李能和の命を受けて、『正統藏経』に収録された韓国人僧侶の著作の筆写作業を行った。当時は複写機械もなかったのですべて手書きで行わざるを得なかった。このように韓国や日本に残る韓国人僧侶の著作を集大成しようとしたのが「朝鮮仏教総書」刊行計画であった¹。

この「朝鮮仏教総書」刊行計画の母体となった団体が朝鮮仏教会という団体であるが、これは後述するように、一九二〇年代当時には、五大仏教団体の一つとして取り上げられるほどの団体であった。ところがこの団体に対する研究は行われていない。本稿は、朝鮮仏教会の歴史を調査し、その性格を考察したものである。この研究は、仏教の一つの団体の研究ではあるが、日本併合時代の朝鮮における近代的な知識団体の一つということで時代精神を探究する上でも意義ある作業と考えられる。

二 資料

朝鮮仏教会の活動を伝える資料は次の通りである。

- 一、新聞記事（毎日申報、東亜日報、朝鮮日報、中外日報（日本））
- 二、雑誌記事（朝鮮仏教総報、仏教、開闢、別乾坤）
- 三、朝鮮仏教会刊行物（刊行目録、金剛三昧経論、仏日）
- 四、その他（尹致昊日記、日本思想調査記録等）

考察に先立ち、注意しなければならないのは、「朝鮮仏教会」という名称の団体は三種類あるということだ。第一は、韓龍雲が一九一〇年代に組織したもの、第二は、本稿で扱う李能和などが組織したもの、第三は、日本の僧侶である椎尾弁匡（一八七六一一九七一）が一九三〇年代に作ったものだ。

三 歴史

まず、今私たちが確認できる李能和などが作った朝鮮仏教会の活動時期は一九二〇年三月から一九三〇年六月までの約十年間だ。この十年を、内容から分けると、二つの時期に区分できる。

- 一、第一期……一九二〇年三月―一九二二年四月（約二年）
- 二、第二期……一九二二年四月―一九三〇年六月（約八年）

それではこの時期の区分によって通史的に朝鮮仏教会の歴史を概観する。

（一） 第一期

この時期は仏教の発展、社会化を目的とした事業をした時期だ。一九二〇年三月に朝鮮仏教会が成立した。構

成員は二十九人で専務理事が朴漢永など三名、理事と審議員が李能和など二十六名であった。会の目的は、「一、朝鮮仏教の発展、二、社会精神を指導、三、習俗の虚偽を改良、四、感化事業を振作、五、吾人の生活向上」という五項目である。

同年三月に講演会を行った³。内容は、金明植「俗人の仏教観」、張道斌「朝鮮仏教観」であった。

続いて五月には初八日講演会を行い、六月には苦学生に一〇〇円を寄付した⁵。ところで当時の知識人である尹致昊（一八六五—一九四五）の日記の一九二〇年六月の部分を見ると、当時、朝鮮仏教会が仏教界の五大団体の一つとして取り上げられていたことが分かる⁶。ここでは当時の社会団体約六〇を挙げ、中に仏教系団体が五つある。すなわち一、仏教大会、二、仏教擁護会、三、仏教振興会、四、朝鮮仏教会、五、仏教青年会である。

続いて、一九二二年三月、覚皇寺で『楞嚴経』の講義を行った⁷。そして九月にワシントンで開かれる太平洋会議に送った「大韓人民の建議書」に他の仏教界団体とともに署名をした⁸。

(二) 第二期

一九二二年三月に成立二周年記念行事が開かれた⁹。翌月四月に「第四回定期総会」が開かれたが、これが朝鮮仏教会の転機となった。重要な変化は、一、李能和が理事長に就任したこと、その時に二、新羅、高麗の典籍の刊行を決議したということだ。これが「朝鮮仏教総書」につながった。

同年一二月に鄭晧震が『毎日申報』に『朝鮮仏教総書』に関する記事を連載した¹¹。

一九二三年六月、李能和らは元暁の『金剛三昧経論』を刊行した。李能和が書いた序文を見ると、この『金剛三昧経論』は崔南善が呉徹浩に資料を提供したもので、呉徹浩の師匠であった劉敬鍾が校閲して発刊したという¹²。発売所は新文館である。

一九二四年二月、日本の新聞「中外日報」に朝鮮仏教総書に関する報道が出た。これは「朝鮮藏経刊行企画、李、鄭氏同時に企図」という題目でその活動を紹介した。¹³このように、朝鮮仏教総書刊行計画は日本でも注目を集めていた。ところが日本では当時『大正新脩大藏経』の刊行が進められていた。

同年六月、雑誌『開闢』に仏教系団体が紹介された。¹⁴そこには次の五つの団体と活動内容、責任者の名前が紹介された。

- 一、三十本山連合事務所（郭峰暁、金九河など）
- 二、朝鮮仏教会（仏経刊行目的、朴漢永）
- 三、朝鮮仏教青年会（仏教内容の革新、韓龍雲）
- 四、仏教女子青年（ウ・ボンウン）
- 五、禅学院（純然たる禅師の伝捕目的、キム・ナムチョンなど）

これを見ると、朝鮮仏教会がこの時期にも仏教界の五大団体として取り上げられていることがわかる。そして活動内容が「仏経刊行」になっていることを見ると、朝鮮仏教総書刊行計画が当時にある程度は認知されていたことがわかる。

そして七月には朝鮮仏教会の雑誌『仏日』が刊行された。後述するが、同誌は第二号で終了し、啓蒙的な内容が多く、仏書刊行とは直接の関係がないものと見られる。

翌年の一九二五年は朝鮮仏教総書にとって重要な年である。まず三月、鄭暁震が「朝鮮大藏経自願募縁文」を作成した。これは大藏経を供養すれば利益があるということを書いて、一般人に大藏経事業に協力を要請したも

のだ。そして鄭昞震は朝鮮大藏經の作成には五万円が必要だと説いた。現在、この資料は高麗大学図書館に所蔵されている。

六月、朝鮮仏教総書刊行の趣旨書が雑誌「仏教」に掲載された。そして同月、鄭昞震が今度は朝鮮仏経刊行会主務編纂院の名前で当時中国仏教界の中心人物だった太虚（一八九〇―一九四七）に手紙を送った。太虚はその手紙を雑誌に掲載した。

七月、朝鮮仏教総書刊行目録を発行した。この段階では一〇月から刊行が始まる予定だった。しかし、実際には刊行は行われなかった。

一月には金泰治（日本に留学した僧侶）が雑誌『仏教』に「朝鮮仏教総書刊行について」を掲載し、仏教界に協力を要請した。

一九二六年七月、鄭昞震が再び中国に手紙を送り、協力を要請した。今回は『世界仏教居士林』を主宰していた王與楫（一八八三―？）に手紙と目録を送ったが、王はそれを雑誌に掲載した。

一九二七年一月、今度は日本の駒澤大学総長だった忽滑谷快天（一九二一―一九三四）が、日本で朝鮮仏教総書の宣伝を行った。大学の雑誌『第一義』に「朝鮮仏教総書刊行について（購読申込を乞う）」を掲載したのである。¹⁵これはその翻訳が一九二八年一月、雑誌『仏教』四三号に掲載された。

一九二八年五月、李能和は雑誌『別乾坤』に論文「仏教と朝鮮文化」を掲載したが、この時、朝鮮仏教会では新羅の仏家たちの著述を発刊しようとしたが、原稿だけでも四〇冊を超過したと言った。¹⁶ところで筆者の調査によると、現在、東国大学の図書館に「朝鮮仏教総書」と書かれた原稿が所蔵されていて、それは原稿用紙に筆写したもので、現在五冊残っている。¹⁷おそらくこれが、李能和が言ったことの一部ではないかと思う。

一九二九年一〇月、ソウルで朝鮮仏教大会が開かれた。¹⁸この時、李能和は大会に参加した外国の僧侶、学者た

ちに支援を要請した。¹⁹

一九三〇年六月、日本の警察が作った資料の中に朝鮮仏教会の役員交替があり、その中に朝鮮仏教会の代表としてキム・ジョンネ、キム・ヨンジンなどの名前がある。そこには李能和や鄭眺震の名前はない。これが現在の朝鮮仏教会を追跡できる最後の資料である。

四 性格

ここでは朝鮮仏教会の活動をより具体的に見ることで、その性格を考察しようと思う。

(一) 一九二〇年成立時

1 成立目的

この時期は韓国仏教の発展、仏教の社会化を試みた時期である。まず「成立宣言書」に取り上げられた五項目を提示する。

- 一、朝鮮仏教の発展
- 二、社会精神を指導
- 三、習俗の虚偽を改良
- 四、感化事業を振作
- 五、吾人の生活向上

これを見ると、韓国仏教の発展、仏教の社会化を目指していたことが分かる。

2 構成員

創立当時の構成員は次の二九名である。

・ 総裁…未定

・ 専務理事 (三名) …朴漢永、李命七、吳徹浩

・ 理事 (九名) …徐丙協、高義東、崔昌善、梁建植、權惠奎、吳鳳憲、尹翼鉉、洪祐夔、李潤鉉

・ 審議員 (一七名) …李胤鍾、李能和、金榮鎮、金敦熙、李光鍾、金浩秉、李混愷、權純九、金晶海、李愚

暲、李智光、鄭眺震、馬相学、金溶泰、李青雲、黄珪、崔鏞植

このうち傍線を引いたのが僧侶で、残りは一般知識人と考えられる。ここからこの団体の成立目的の一つが僧侶中心の仏教団体ではなく一般知識人を中心とした団体を指向したのではないかという印象を持つ。そしてそのお坊さんも特徴がある。つまり李混愷、金晶海、李智光、鄭眺震は曹洞宗大学（現駒澤大学）に留学した僧侶たちで、そこで僧侶も既成勢力の僧侶ではなく、若くて先進的な考えを持った僧侶を登用したのではないかと推測できている。

そのような既成団体と距離を置こうとしたことは『朝鮮日報』一九二〇年七月八日の記事から読みとれる。これは朝鮮仏教会の真相を声明する「朝鮮教会代表者談」という記事だ。その代表者が誰なのかは定かではないが、その記事の中で強調したのが、李懷光、姜大淵の対立など、当時の仏教界の混乱と関係ないことを表明しており、

また当時の普教団体である仏教振興会、仏教擁護会とは全く異なる組織であることを強調している。

3 活動内容

以下に、この時期の具体的な活動内容を検討する。ここでは三つに分けて検討する。

・講演会

現在確認できる講演会は次の三回だ。実際にはもっとあったかもしれないが、今はこれを検討する。

一九二〇年三月、金明植「俗人の仏教観」、張道斌「朝鮮仏教観」、

一九二〇年五月、李潤鉉「仏誕八相」、李智光「天上天下唯我獨尊」、

一九二二年一月、朴漢永「見道」、權徳奎「真理がわかったら」

このうち一九二〇年三月に行われたのは、朝鮮仏教会創立記念として開かれたもので、ここに朝鮮仏教会の特徴を見ることができると言える。すなわち講演を行った人物である金明植（一八九〇―一九四三）と張道斌（一八八八―一九六三）は僧侶ではなく一般知識人だった。彼らが仏教について講演すること自体が仏教の社会化を図った造仏教の目的と符合したのではないかと考えられる。

・講經

次は講經である。一九二一年には覺皇寺で『楞嚴經』を講義していた記録がある。ところが、これと関連のある資料を探した。それは現在、ソウル大学奎章閣に所蔵されている朝鮮仏教会の『楞嚴經』である。内容を見ると『楞嚴經』の言解本を翻訳したものと見られる。

・感化事業

次に、感化事業、すなわち今の社会福祉活動である。現在、見ることが出来る資料では、

一九二〇年六月 苦学生に寄付

一九二一年四月 苦学生に寄付

が見える。この他にも今資料にはない活動があっただろうが、現段階では以上のような活動が見られる。

(二) 一九二二年以降

1 役員改正と朝鮮仏教総書刊行計画

翌一九二二年以降に活動を検討する。まず、この時期に重要なのは一九二二年四月の役員改正だ。この時の役員は次の二〇名である。

理事長 (一名) .. 李能和

理事 (一四名) .. 朴漢永 (真諦部長)、呉浩 (建化部長)、高義東 (社会部長)、崔昌善 (経理部長)、権老奎、
梁建植、朱宰品、孫俊模、白禹鏞、金秉龍、李秉岐、晄、林青、韓沖

議事長 (一名) .. 李光鍾

議事 (四名) .. 金永七、韓聖、洪祐夔、崔鏞植

この時、李能和が理事長に就任し、その時の決議で刊行着手、すなわち「朝鮮仏教総書」刊行計画に着手したことが特徴だ。

ところが結局「朝鮮仏教総書」刊行計画は挫折したが、その理由と推測できるのが予算問題だと考えられる。特に、当時中心的な位置にあった僧侶たちの協力を得ることができなかったのが挫折した大きな要因だと考えられる。

2 雑誌『仏日』の刊行

次に一九二四年に朝鮮仏教会が刊行した雑誌を検討する。朝鮮仏教会では朝鮮仏教会の中に仏日社という団体を作って『仏日』という雑誌を刊行した。同誌は二号で終了した。この雑誌は現在『韓国近代仏教資料全集』五八（民族社、一九九六年）で見ることが出来る。

第一号の編集同人は次の通りである。金益昇、金世暎、朴漢永、白相奎、呉徹浩、梁建植、李能和、崔南善、黄義敦、権相老。規約を翻訳したものを次に掲げる。

仏日社社友会規約

- 一、本会は仏日社社友会と称し、位置を朝鮮仏教会内に置く。ただ必要な地方には支会を置く。
- 二、本会の会員は有功会員、特別会員、通常会員の三種とする。
- 三、本会の通常会員は一般的には誰でも入会ができる。
- 四、会員がその住所を移転する時には本社友会に通知しなければならない。
- 五、会員には『仏日』が発刊されると郵便にて送られる。
- 六、本会に入会する方は、かならず会費三か月分以上を送らなければならない。

七、本会の有功会員と特別会員の会費は次の通りである。

有功会員 毎年金拾円以上、または一時金一百円以上

特別会員 毎年金五円以上、または一時金五十円以上

八、本会通常会員の会費は次の通り。

一か月分 十五銭

六か月分 八十銭

一年分 一円五十銭

目次は次の通りである。

一、創刊辞

二、日暮黄昏에对 (龜山人)

三、釈迦伝 (高山樗牛著、黄義敦訳)

四、達磨祖師略伝 (無能居士・李能和)

五、懶翁和尚禅曲 (解波・金世暎選)

六、仏教用語 (無能居士・李能和)

七、朝鮮仏教歴史 (尚玄居士・李能和)

八、仏의 概念 (石沙門・朴漢永?)

九、摩訶般若波羅密多心経訳解 (龍城堂・白相奎)

一〇、부터님세계그림장엄 데일장 (海波)

一一、미타경즉역 (退權相老)

一二、朝鮮仏教会決算報告書

これら題目を見ると仏教に対する啓蒙的な内容が多いことがわかる。そして、この中には朝鮮仏教総書関連の記事はない。ただ筆者が注目したのは「一二、朝鮮仏教会決算報告書」である。これを見ると、当時の朝鮮仏教会の活動内容が分かると思われるのだが、残念ながらこの部分は残っていない。

続いて第二号の編集同人は、金益昇、朴漢永、白相奎、呉徹浩、梁建植、李能和、崔南善、黄義敦、權相老で、大きな変化はない。目次は次のようである。

- 一、思想改造問題에 대하여
- 二、仏教의 女性觀 (靈齋生)
- 三、朝鮮仏教歴史 (尚玄居士・李龍和)
- 四、釈迦伝 (高山樗牛著、黄義敦訳)
- 五、靈山会上の曲譜新制、朝鮮音楽の歴史略述 (白禹鏞)
- 六、仏教用語 (無能居士・李能和)
- 七、仏教의 概念 (石沙門・朴漢永?)
- 八、仏日先生맛게되는 우리의 즐거움 (李光世)
- 九、仏説無量寿에서 四十八願 (權退耕訳・權相老)

この目次を見ると、その性格は一号と差がないことがわかる。

五 結論

以上、一九二〇年代に活動し、朝鮮仏教総書の刊行を計画した朝鮮仏教会について、その歴史と性格を見てみた。最後に整理する。

まず歴史について。今私たちが知ることができる朝鮮仏教会の活動は一九二〇年から一九三〇年の約一〇年間であり、その時期は二期に区分することができた。そして朝鮮仏教総書の計画は第二期に属していることを確認した。その活動と性格を時期別に見ると、一九二〇年の成立時には朝鮮仏教の発展、社会化を図り、構成員も僧侶より一般の知識人が多かった。活動内容としては、講演会、講経、感化活動を行った。ところが、一九二二年以降、その性格は変化する。つまり、この頃から『朝鮮仏教総書』の刊行に尽力する。まず一九三三年には元暁の『金剛三昧経論』を発刊し、一九二五年には刊行趣旨と刊行目録を発行したが、実際には刊行には至らなかった。そして一九二四年には雑誌『仏日』を二号まで刊行し、そこには仏教啓蒙的な内容を掲載した。

最後に近代韓国仏教における朝鮮仏教会の位置は次のように考えられる。

- 一、仏教近代化を図り、一九二〇年代の五大仏教団体の一つであること。
 - 二、僧侶と知識人とが合同で形成された仏教団体であること。
 - 三、「朝鮮仏教総書」の実現はできなかったが、近代的仏教学の存在感を示したと考えられること。
- 今後も他団体との関係など、本体はもちろん周辺の研究も行っていきたい。

〔参考文献〕

・一次資料

〔尹致昊日記〕

〔開闢〕

〔中外日報〕

〔朝鮮日報〕

〔朝鮮仏教総報〕

〔朝鮮仏教総書 趣旨及内容見本会規書目〕（朝鮮仏書刊行一九二五年）

〔東亞日報〕

〔仏教〕

〔仏日〕

〔毎日申報〕

〔別乾坤〕

〔日本思想調査記録〕

・二次資料

単行本

金光植 『韓國近代仏教史研究』（民族社、一九九六年）

鄭晧鏞 『近代韓日仏教關係史研究』（仁荷大学校出版部、一九九四年）

論文

佐藤厚 『朝鮮仏教総書刊行計画について（一）』 東洋大学東洋学研究所 『東洋学研究』 五三号（東洋大学東洋学研究所、二〇一五年三月）

—— 『朝鮮仏教総書刊行計画について（二）』 東洋大学東洋学研究所 『東洋学研究』 五四号（東洋大学東洋学研究所、二〇一六年三月）

- 注
- 1 佐藤厚「朝鮮仏教総書刊行計画について(二)」東洋大学東洋学研究所『東洋学研究』五四号(東洋大学東洋学研究所、二〇一六年三月)
 - 2 「朝鮮仏教会発起」『毎日申報』一九二〇年三月一〇日
 - 3 「仏教講演速記(一)」『毎日申報』一九二〇年三月三日、「仏教講演速記(2)」『毎日申報』一九二〇年四月一日、「仏教講演速記(3)」『毎日申報』一九二〇年四月二日、「仏教講演速記(4)」『毎日申報』一九二〇年四月六日、「仏教講演速記(5)」『毎日申報』一九二〇年四月七日
 - 4 「今日は四月初八日」『毎日申報』一九二〇年五月二五日
 - 5 「苦学生に同情朝鮮仏教会から百ウォンを寄付して」『毎日申報』一九二〇年六月二四日
 - 6 「尹致昊日記」八、一九二〇年六月二三日、韓国史料叢書一九。
 - 7 「朝鮮仏教会では：」『毎日申報』一九二一年三月二二日、この資料は、以前まで行っていた『楞嚴経』の講義を、学生たちの学校試験があるために延期するという記事だ。
 - 8 韓国人民治太平洋会議書「軍縮会議への韓国請願書」(英文翻訳、一九二二) ここで仏教系団体をみると、仏教代表として洪甫龍と朴漢永、朝鮮仏教会代表として李能和と金泰欽、仏教振興会代表として金弘祚と申羽均、仏教青年会代表として金尚昊と都鎮鎬の名がある。
 - 9 「朝鮮仏教創立記念」『東亜日報』一九二二年三月七日
 - 10 「朝鮮仏教定期総会」『東亜日報』一九二二年四月二七日
 - 11 「朝鮮古仏書蒐集に就いて」『毎日申報』一九二二年二月二三日、同二四日、同二六日、同二七日。
 - 12 李能和「金剛三昧経論序」、朝鮮仏教会、一九三三年
 - 13 「中外日報」一九二四年二月一〇日
 - 14 「開闢」四八号、一九二四年六月一日
 - 15 「第一義」、一九二七年一月
 - 16 李能和「仏教と朝鮮文化」『別乾坤』第二二一三号、一九二八年五月。「新羅仏家の著述の大部分は遺失不伝となっており、わが朝鮮仏教会が蒐集発刊する計画である浄写しただけでも四〇冊を超え、その他にも、彼はもっと存在すると確信している。」
 - 17 ①瓊興「無量寿経連義述文贊」、②瓊興(?)「瓊瑤本業経疏」、元晔「弥勒上生经宗要」、元晔「戒本持犯要記」、元晔「仏説阿

- 弥陀経疏」、③ 覚苑『大毘盧遮那成仏神変加持経義积演密鈔』、思議『大毘盧遮那経供養次第法疏』、④ 道倫『瑜伽論記』卷一六一
二〇、⑤ 太賢『大乘起信論内義略探記』、見登補『大乘起信論同異略集』
- 18 朝鮮仏教大会については中西直樹『植民地朝鮮と日本仏教』（龍谷叢書三一、三人社、二〇一三年）「第四章 文化政治と朝鮮仏教界の動向」「五 朝鮮仏教大会の開催とその反響」一九九―二〇六参照
- 19 「朝鮮仏教大会紀要」（朝鮮仏教団、一九三〇年）七〇頁
- 20 「朝鮮仏教会役員異動の件」一九三〇年六月二十六日、京城鍾路警察署長

History and Character of the Association of Korean Buddhist: The Organization that Planned the Publication of “Chosun Buddhist General Book” in the 1920s

SATO Atsushi

Abstract

The purpose of this paper is to elucidate the history and character of the Chosun Buddhist Association, which was active in the 1920s. The history of the group covers the decade from 1920 to 1930. It can be divided into two periods: 1920-21 and 22-30.

The first period was aimed at the development and socialization of Korean Buddhism. Its members were more lay people than Buddhist monks.

The second period was centered on the project of the “Chosun Buddhist General Book”. They published Won hyo’s “Treatise on the Vajrasamadhi Sutra” and a catalog of the General Book of Chosun Buddhism in 1925. However, the publication did not materialize. Probably due to the problem of lack of funds.